大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

大島本『源氏物語』における動詞ウ音便：「思ひ給ふる」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥村, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002608

大島本『源氏物語』における動詞ウ音便
—「思ひ給ふる」について—

奥　村　和　子

1．はじめに

平安期和文資料においては、ウ音便を起こす動詞がほぼ「給ふ」と「思ふ」の二語に限られており、かつ「思ふ」が音便を起こすのは「給ふ」を下接させる場合に限られるという傾向が見られる。しかしてその「思ふ」に下接する「給ふ」には四段に活用する尊敬の補助動詞「給ふ」と、下二段に活用する謙譲の補助動詞「給ふ」（以下「給ふる」と表記）の両方が見られるが、音便はもっぱら音便を起こしやすい条件を兼ね備えた後者において起こっている(1)。中世以降の資料において動詞の非音便形と音便形とは、話し手の位相、文脈、動詞、音的要因等によって使い分けられることが指摘されているわけだが(2)、この平安期和文資料における動詞ウ音便には、動詞の限定の他に何らかの特徴が見られるのか、本稿はその調査についての報告である。

2．調査方法

新日本古典文学大系本『源氏物語』（底本は飛鳥井雅康本。以下「大島本」と表記する）を用いて、索引を元に「思ひ」＋「給ふ」形をすべて抜き出した。なお、複合動詞に「給ふる」が続く場合は上接動詞と下接動詞との間に「給ふる」が入りこみ、「思ひ給へ知る」の如き形になる。これについて、前稿(3)では用例から省いたが、今回はすべて拾った(4)。振り仮名については、凡例を参考に処理した(5)。また新大系本の底本は大島本であるが、「浮舟」巻のみ明融本となっている。諸本による異同が多いと考えられる問題を扱うため、「浮舟」における用例は数えず、必要に応じて別掲する。

3．調査結果

3－①「思ひ給ふ」と「思ひ給ふる」

まず、活用形を元に、「思ふ」に下接する「給ふ」を四段活用の「給ふ」と下二段活用の「給ふる」とに分類した結果は次のようである。数字は「音便率（音便形の用例数／合計用例数）」（非音便形の用例数、音便形の用例数、合計用例数）を示す。

思ひ給ふる　51%（非音便 117　音便 120　合計 237）

思ひ給ふ　　12%（非音便 44　音便６　合計 50）

＊「浮舟」巻　思ひ給ふる５例中５例音便、思ひ給ふ１例中１例音便

カガ行動詞が「給ふ」を下接させる場合のイ音便は非常に例が多いのに対して、ウ音便「思う給ふ」は例が少ない。もともと「お思いになる」意の尊敬動詞「おぼす」「おぼしめす」の存在もあり、「思ひ給ふ」自体あまり現れないのであるが、割合で見ても「思ひ給ふる」に比して音便形はかなり少ないことになる。

更に、『源氏物語』では「給ふ」と「給ふる」の活用の混乱例（「給ふる」が四段に活用する）が指摘されており(6)、ここで「思ひ給ふ」の音便例として数えた６例も、そのうち４例までは謙譲に解釈され得る。つまり尊敬の意の「思ひ給ふ」の音便例はきわめて少ないのである。

また、四段に活用する謙譲の「給ふる」の前に現れる「思ふ」は、音便形か、もしくは送り仮名の無い（すなわち語尾が不明な）場合のみであって、非音便形が見られない。このことからは、活用が紛らわしい場合に尊敬と謙譲の区別の指標として音便が機能する可能性を考えたいところであるが、先に述べた通り、わずかながら尊敬「思ひ給ふ」の音便形も見られる。

なお、下二段「給ふる」の活用形による音便率は次のようである。四段活用と共通した形を持つ未然・連用・終止形で音便率がやや高いが、さほど差があるわけではなく、「給ふる」の活用形が音便の有無に影響を与えたとは認めづらい。

	非音便	音便	合計	音便率
未然形	24	28	52	54%
連用形	63	62	125	50%
終止形	0	1	1	100%
連体形	26	22	48	46%
已然形	4	2	6	33%

３－②「思ひ給ふる」の話し手と聞き手

次に、「思ひ給ふる」が出現するのは会話文、もしくは手紙に限られることから、その話し手と聞き手に注目して考察する。まず、話し手、聞き手によって分類した数値を次に示す。

【話し手の性別】

女性の発話　音便率 50%（非音便 40　音便 40　合計 80）

男性の発話　音便率 51%（非音便 77　音便 80　合計 157）

合計　音便率 51%（非音便 117　音便 120　合計 237）

【話し手別】（音便の有無を判別できる用例が５例以上ある話者の音便率、
２行目以下は非音便形、音便形それぞれの用例の聞き手を示す）

○夕霧　音便率 29%（非音便 10　音便４　合計 14）

非・御息所４、玉鬘２、源氏２、大宮１、明石姫君の乳母１

音・御息所１、朱雀院１、大宮１、内大臣１

○桐壺の母　音便率 40%（非音便３、音便２、合計５）

非・命婦（帝の使い）３

音・命婦（帝の使い）２

○源氏　音便率 47%（非音便 26、音便 23、合計 49）

非・藤壺７、尼君４、秋好中宮３、梅壷女御２、蛍兵部卿宮２、葵の上１、
御息所１、若君１、冷泉帝１、女五の宮１、僧都１、大宮１、朧月夜１

音・大宮４、朱雀院３、藤壺３、御息所３、頭中将３、宰相の君２、
王命婦１、蛍兵部卿宮１、左大臣１、帥の宮１、梅壷女御１

○弁　音便率 50%（非音便 11、音便 11、合計 22）

非・薫 10、浮舟１

音・薫 10、浮舟１

○玉鬘　音便率 50%（非音便３、音便３、合計６）

非・源氏１、夕霧２

音・源氏２、雲居の雁１

○柏木　音便率 50%（非音便３、音便３、合計６）

非・夕霧３

音・御息所（義理の母）２、女三の宮１

○薫　音便率 56%（非音便形 11、音便 14、合計 25）

非・僧都５、匂宮３、中の君２、明石中宮１

音・中の君４、八の宮４、匂宮３、大君１、女房１、弁１

○左大臣　音便率 60%（非音便２、音便３、合計５）

非・源氏２

音・源氏３

○頭中将　音便率 63%（非音便６、音便 10、合計 16）

非・源氏３、大宮２、夕霧１

音・源氏４、大宮６

○明石の入道　音便率 71%（非音便２、音便５、合計７）

非・源氏１、明石の君（娘）１

音・源氏３、明石の君（娘）１、良清（源氏の使者）１

○左馬守　音便率 86%（非音便１、音便６、合計７）

非・源氏たち１

音・源氏たち６

○中将の君（浮舟の母）音便率 100%（非音便０、音便５、合計５）

音・中の君４、薫１

同じ話し手が同じ聞き手に対して音便形と非音便形の両方を用いている例が多く見られる。また、話し手として比較的音便率の高い左馬守、明石入道等は、「思ひ給ふる」の聞き手としては現れない人物である。このほか、話し手としての用例が少数ながらいずれかに偏っている例としては、

すべて非音便　藤壺３（源氏、冷泉帝）、明石の君の母２（源氏）

すべて音便　惟光２（源氏）、常陸介３（仲人）、明石の君４（娘、源氏）

等があり（(　) 内は聞き手を表す）、惟光や常陸介等もっぱら音便形を用いている人物は、やはり聞き手として現れないことが多い。

【聞き手の性別】

聞き手が女性　音便率 53%（非音便 46、音便 52、合計 98）

聞き手が男性　音便率 50%（非音便 72、音便 73、合計 145）

※話し手、聞き手がそれぞれ個人に特定されない場合や、男女両方の場合もあるため、合計数は話し手の数値と一致しない。

【聞き手別】(音便の有無を判別できる用例が５例以上の聞き手にむけての音便率、２行目以下は非音便、音便形それぞれの話し手を示す)

○僧都　音便率 0%（非音便６、音便０、合計６）

非・薫５、源氏１

○夕霧　音便率 11%（非音便８、音便１、合計９）

非・柏木３、玉鬘２、御息所１、源氏１、内大臣１

音・御息所１

○藤壺　音便率 30%（非音便７、音便３、合計 10）

非・源氏７

音・源氏３

○頭中将　音便率 33%（非音便２、音便４、合計６）

非・近江の君１、雲居の雁の乳母１

音・源氏３、夕霧１

○命婦　音便率 40%（非音便３、音便２、合計５）

非・桐壺の母３

音・桐壺の母２

○匂宮　音便率 43%（非音便４、音便３、合計７）

非・薫３、侍従１

音・薫３

○御息所　音便率 43%（非音便４、音便３、合計７）

非・夕霧４

音・夕霧１、柏木（娘婿）２

○源氏　音便率 49%（非音便 36、音便 35、合計 71）

非・僧都４、六条御息所３、左大臣２、頭中将２、頭中将たち２、藤壺２、大輔命婦２、夕霧２、明石の君の母２、大宰の大弐２、左馬守１、藤式部丞１、右近１、玉鬘１、空蝉１、帥宮１、朱雀院１、秋好中宮１、少納言１、大弐の乳母１、尼君１、北山聖１、明石入道１

音・左馬守６、左大臣３、明石入道３、内大臣３、明石君２、空蝉２、玉鬘２、惟光２、頭中将１、右近１、紀伊守１、蛍兵部卿宮１、六条御息所１、宰相の君１、大輔命婦１、朱雀院１、秋好中宮１、少納言１、大弐の乳母１

○薫　音便率 56%（非音便 11、音便 14、合計 25）

非・弁１０、中の君１

音・弁１０、中の君１、僧都２、中将の君１

○大宮　音便率 73%（非音便４、音便 11、合計 15）

非・夕霧（孫）１、内大臣（息子）２、源氏１

音・夕霧１、内大臣６、源氏４

○中の君　音便率 80%（非音便２、音便８、合計 10）

非・薫２

音・薫４、中将の君（義理の母）４

このほか、聞き手としての用例が少数ながらいずれかに偏っている例として、すべて非音便　尼君４（源氏）、秋好中宮３（源氏）、冷泉帝２（藤壺、源氏）

すべて音便　朱雀帝４（源氏、夕霧）、八の宮４（薫）
がある。（（　）内は話し手を表す。）

非音便のみを用いられる人物に冷泉帝、音便のみを用いられる人物に朱雀帝が見られ、音便と非音便とではその価値に差がないようにも思われる。しかしながら、非音便形で冷泉帝に話しかけているのは、母親である藤壷と、冷泉帝から譲位を打診された（源氏が父であることを冷泉帝が知っていると認識されたまさにその）場面の源氏であって、やや条件が異なる。

話し手と聞き手の関係としては、先に挙げた惟光の如く話し手としてのみ現れ、聞き手としては現れない人物もいるが、ある程度の身分の人物同士がお互いに用いていることも多いようである。

また、話し手と聞き手の性別の組合せについては次のようである。

男→男	非 38	音 45	合計 83	音便率 54%
男→女	非 39	音 35	合計 74	音便率 47%
女→男	非 33	音 27	合計 60	音便率 45%
女→女	非 7	音 13	合計 20	音便率 65%

異性と話す場合に比べて同性で話す場合にやや音便形が多く見られるようであるが、使い分けていると言えるほどの差ではない。それは同じ会話文中に両形の並存する例がしばしば見られることからも自明であろう。

同じ聞き手に同じ場面で「思ひ給ふる」を複数回用いている例には、たとえば次のようなものがある。

○源氏→藤壷　「澪標」の６例中、最初の１例が音便、後の５例非音便
○源氏→蛍兵部卿宮　「梅枝」２例中、最初の１例が音便、後の１例非音便
○桐壺の母→命婦　「桐壺」４例中、最初の１例のみ音便、後の３例非音便
○夕霧→御息所　「夕霧」２例中、最初の１例が音便、後の１例非音便
○頭中将→源氏たち　「帚木」最初の１例音便、後の１例非音便
○中の君→薫　「宿木」最初の１例音便、後の１例非音便

会話文の最初の１例のみ音便という例が目立つ。また、同じ話し手と聞き手であっても、会話と会話の間が離れており、事態が変化した場合に、音便の割合が変わることがある。

○大輔命婦→源氏

「末摘花」源氏が末摘花に会う前は音便１、会った後は非音便２

この場合も、前半にウ音便形、後半に非音便形が出てくる傾向にある。ただし

例外も多く、たとえば頭中将は当初源氏に非音便形を用いているが、内大臣となってからは音便形を用いている。

ウ音便が会話の導入・挨拶場面に現れやすいこと、また場面が変わる場合には前半部分に現れやすいこと、ウ音便を主に用いる話者は「思ひ給ふる」の聞き手として現われづらいこと、等を考え合わせると、ウ音便形の方が非音便形よりも敬意のあるものとして用いられているようにも見える。これは音便の性質からするとやや疑問であるが、もともとこれら平安期和文資料におけるウ音便は「思う給ふる」や「給うて」といった敬語表現においてよく見られるわけである。

とすれば、上に挙げた頭中将と源氏の会話については、頭中将時には源氏と友人として接していたものが、後に内大臣になってからはややよそよそしい関係になったことの影響と考えられようか。実際、内大臣は音便形を用いている会話の冒頭で「いにしへはげに面馴れて、あやしくたいだいしきまで馴れさぶらひ」（行幸）と言っており、昔の方が源氏に対して馴れ馴れしい態度であった旨を述べている。

また弁から薫への発話では、最初に非音便形を用いるのであるが、その会話の直後に地の文で「いとつゝみなくもの馴れたるも」（橋姫）とあり、無遠慮な物言いであることが記される。その後は音便形を用いるものの、弁が薫に出生の秘密を告げるあたりから非音便形が目立つようになり、この秘密とともに大君の死への悲しみ等をも共有した「早蕨」「宿木」巻になると非音便形のみが用いられる、といった例も見られる。

音便と敬意とのかかわりについては、なお詳細な検討が必要であろう。

3—③その他

その他、「思ふ」が何らかの動詞を伴って複合動詞（「思ひ沈む」「思ひ立つ」等）を構成しているか否かによる音便の有無、及び、巻ごとの音便率を算出した結果が次の表である。複合動詞に関しては単独で用いられる場合より若干音便の割合が高いが、これも誤差程度であろう。巻については偏りがあるが、これについては今回考察が及ばなかった。

【動詞の単複】

	非音便	音便	合計	音便率
複合動詞	42	46	88	52%
単独動詞	75	74	149	50%

【巻ごと】

巻	音便率	紅葉賀	0%	澪標	50%
桐壺	43%	花宴	—	蓬生	0%
帚木	71%	葵	25%	関屋	—
空蝉	—	賢木	33%	絵合	50%
夕顔	71%	花散里	—	松風	0%
若紫	6%	須磨	60%	薄雲	17%
末摘花	25%	明石	80%	朝顔	0%
少女	57%	藤裏葉	50%	竹河	17%
玉鬘	0%	若菜上	100%	橋姫	79%
初音	—	若菜下	67%	椎本	—
胡蝶	100%	柏木	0%	総角	100%
螢	100%	横笛	50%	早蕨	75%
常夏	33%	鈴虫	20%	宿木	36%
篝火	—	夕霧	33%	東屋	89%
野分	0%	御法	—	(浮舟)	100%
行幸	100%	幻	0%	蜻蛉	20%
藤袴	—	雲隠	—	手習	0%
真木柱	—	匂宮	—	夢浮橋	29%
梅枝	50%	紅梅	100%	合計	52%

4．まとめ

以上、大島本「源氏物語」における「思ふ」のウ音便形についての調査結果をまとめると次のようになるかと思う。

＊「思ふ」がウ音便を起こすのは下に「給ふ」もしくは「給ふる」を伴う時であるが、尊敬の「給ふ」を下接する例は謙譲「給ふる」に比してきわめて少ない。また、謙譲「給ふる」が四段に活用しているように見える例では、「思ふ」が音便を起こしていることが多い。

＊「思ひ給ふる」は会話文（手紙文）に現れる語であるが、話し手及び聞き手の性別による用いられ方の差はほとんど見られない。状況としては、会話の序盤等、あまり話し手と聞き手の関係が馴染んでいない時や、話し手の身分があま

り高くない場合に音便の用いられる傾向がある。このことからは非音便形よりも音便形の方が敬意のある表現のように見え、それは音便形の性質からはやや考えがたいようにも思われるが、『源氏物語』における動詞ウ音便自体が「給ふ」及び「思ひ給ふる」という敬語表現に偏って現れる語である。少なくともこの底本において、音便を待遇表現的価値の低いものだと解釈することは難しい。これについては、ウ音便を起こすもう一つ動詞「給ふ」についても詳しく検証したいところであり、今後の課題としておく。

なお、「思ひ給ふる」の非音便形及び音便形の話し手と聞き手の一覧表を、それぞれ表１、表２として文末に示す。

注

(1)　江口正弘氏「中古和文資料における動詞の音便形 ―源氏物語のイ音便ウ音便を中心に―」(『国語と国文学』昭 50-5)、拙稿「平安期和文資料におけるハ行四段動詞ウ音便形について」(『国語語彙史の研究　二十』和泉書院、平 13) なお、本稿で資料を扱う際の注意事項は、特に表記しない限りこれに準ずる。

(2)　湯澤幸吉郎氏『徳川時代言語の研究』(刀江書院・昭 11) ／浜田敦氏「中世の文法」『日本文法講座３』／橋本四郎氏「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』(昭 37・４) ／奥村三雄氏「サ行イ音便の消長」『国語国文』(昭 43・１) ／蜂谷清人氏「室町末ハ行四段動詞連用形の音便―狂言・説経・幸若舞を中心に―」(『国語学研究』18・昭 53) ／松井利彦氏「ハ行四段動詞の音便―近世漢文訓読における―」(『論集日本文学・日本語４』・昭 53) ／柳田征司氏『室町時代の国語』東京堂出版 (昭 60) ／小松寿雄氏『江戸時代の国語江戸語』東京堂出版 (昭 60) ／柳田征司氏『室町時代語を通して見た日本語音韻史』(武蔵野書院・平５) 他

(3)　注(1)に掲げた拙稿。

(4)　そのため、前稿とは用例数が異なる。

(5)　もともと平仮名であったものを漢字にした場合に振り仮名として残した形のものは用例として拾い、必要に応じて振ったとされる (　) の付く振り仮名は扱わない。

(6)　根来司氏『源氏物語の敬語法』(明治書院・平３) 他

(おくむらかずこ・本学専任講師)

表１　非音便形（左から新大系本の巻・ページ数・行数・話し手・聞き手）

1	169-14	頭中将たち	源氏
1	140-14	右近	源氏
1	389-10	右大臣	弘徽殿
2	299-07	雲居雁乳母	内大臣
3	009-13	玉鬘	源氏
4	257-09	玉鬘	夕霧
4	258-03	玉鬘	夕霧
1	008-07	桐壺	帝
1	012-15	桐壺の母	命婦
1	013-12	桐壺の母	命婦
1	014-01	桐壺の母	命婦
3	019-13	近江の君	内大臣
1	069-09	空蝉	源氏
5	393-04	薫	僧都
5	396-05	薫	僧都
5	396-08	薫	僧都
5	396-14	薫	僧都
5	398-06	薫	僧都
5	043-05	薫	中の君
5	063-08	薫	中の君
4	325-14	薫	匂宮
5	277-11	薫	匂宮
5	278-05	薫	匂宮
5	385-13	薫	明石の中宮
1	191-15	源氏	葵の上
3	155-03	源氏	蛍兵部卿宮
3	163-14	源氏	蛍兵部卿宮
2	028-14	源氏	御息所
1	335-15	源氏	若君
4	080-03	源氏	秋好中宮
4	082-08	源氏	秋好中宮
4	082-10	源氏	秋好中宮
2	253-09	源氏	女五の宮
1	160-13	源氏	僧都
2	281-15	源氏	大宮
1	254-08	源氏	藤壺
2	125-07	源氏	藤壺
2	125-09	源氏	藤壺
2	125-11	源氏	藤壺
2	125-13	源氏	藤壺
2	126-04	源氏	藤壺
2	231-07	源氏	藤壺
1	166-14	源氏	尼君
1	173-12	源氏	尼君
1	180-04	源氏	尼君
1	180-14	源氏	尼君
2	241-06	源氏	梅壺女御
2	241-10	源氏	梅壺女御
2	238-14	源氏	冷泉帝
2	016-04	源氏	朧月夜

2	027-13	御息所	源氏
2	028-02	御息所	源氏
4	092-01	御息所	夕霧
1	171-11	左大臣	源氏
1	323-15	左大臣	源氏
1	050-02	左馬守	源氏たち
5	284-01	侍従	匂宮
4	019-07	朱雀院	源氏
4	080-11	秋好中宮	源氏
3	383-09	小侍従	女三の宮
1	183-14	少納言	源氏
2	183-09	帥宮	源氏
1	160-09	僧都	源氏
1	163-06	僧都	源氏
1	168-01	僧都	源氏
1	182-15	僧都	源氏
4	275-10	蔵人の少将	大君
2	035-02	大宰の大弐	源氏
2	035-05	大宰の大弐	源氏
1	102-05	大弐の乳母	源氏
2	340-02	大夫監	玉鬘の祖母
1	228-11	大輔命婦	源氏
1	229-06	大輔命婦	源氏
5	093-13	中の君	薫
1	058-03	藤式部丞	源氏たち
1	377-14	藤壺	源氏
2	126-02	藤壺	源氏
2	229-03	藤壺	冷泉帝
1	055-10	頭中将	源氏たち
1	218-14	頭中将	源氏
2	205-13	頭中将たち	源氏
2	296-05	内大臣	大宮
2	296-07	内大臣	大宮
3	181-07	内大臣	夕霧
1	166-03	尼君	源氏
2	201-12	尼君	源氏
2	201-13	尼君	源氏
4	023-11	柏木	夕霧
4	024-03	柏木	夕霧
4	024-11	柏木	夕霧
4	318-04	弁	薫
4	331-10	弁	薫
4	332-04	弁	薫
4	332-13	弁	薫
5	013-14	弁	薫
5	089-06	弁	薫
5	089-08	弁	薫
5	089-09	弁	薫
5	115-09	弁	薫
5	290-12	弁	薫

5	175-13	弁	浮舟
1	153-02	北山の聖	源氏
2	142-10	末摘花叔母	末摘花
2	065-05	明石入道	源氏
2	069-13	明石入道	源氏
2	196-01	明石入道	明石君
2	058-09	明石入道	良清
4	141-12	夕霧	花散里
4	257-13	夕霧	玉鬘
4	257-14	夕霧	玉鬘
4	065-07	夕霧	源氏
4	200-03	夕霧	源氏
4	033-14	夕霧	御息所
4	034-02	夕霧	御息所
4	034-05	夕霧	御息所
4	092-03	夕霧	御息所
4	092-04	夕霧	御息所
3	210-11	夕霧	朱雀院
2	316-03	夕霧	大宮
2	316-09	夕霧	大宮
3	181-08	夕霧	内大臣
3	050-05	夕霧	明石姫君乳母
4	103-06	夕霧	落葉の宮
4	121-13	夕霧	落葉の宮
2	320-09	冷泉帝	弘徽殿大后
1	315-12	六条御息所	源氏
1	011-10	靫負命婦	桐壺母

表２　音便形（左から新大系本の巻・ページ数・行数・話し手・聞き手）

1	104-03	惟光	源氏
1	132-01	惟光	源氏
1	138-12	右近	源氏
1	064-10	紀伊守	源氏
2	412-12	玉鬘	源氏
2	438-15	玉鬘	源氏
4	269-10	玉鬘	雲居雁
1	012-12	桐壺の母	命婦
1	012-13	桐壺の母	命婦
3	023-05	近江の君	弘徽殿女御
1	068-06	空蟬	源氏
1	069-10	空蟬	源氏
4	317-02	薫	大君
4	420-09	薫	大君
4	420-10	薫	大君
4	316-09	薫	大君の女房
5	020-03	薫	中の君
5	063-09	薫	中の君
5	082-04	薫	中の君
5	082-06	薫	中の君
4	326-11	薫	匂宮
5	008-05	薫	匂宮
5	008-07	薫	匂宮
4	327-15	薫	八の宮
4	328-04	薫	八の宮
4	328-05	薫	八の宮
4	329-10	薫	八の宮
4	320-15	薫	弁
3	164-01	蛍兵部卿宮	源氏
2	019-11	源氏	王命婦
3	163-08	源氏	蛍兵部卿宮
1	348-14	源氏	御息所
2	119-02	源氏	御息所
2	119-10	源氏	御息所
2	007-12	源氏	左大臣
2	010-01	源氏	宰相の君
2	010-03	源氏	宰相の君
3	227-09	源氏	朱雀院
3	227-10	源氏	朱雀院
3	227-12	源氏	朱雀院
2	182-12	源氏	帥宮
2	282-11	源氏	大宮
3	066-08	源氏	大宮
3	066-15	源氏	大宮
3	068-05	源氏	大宮

1	327-07	源氏	藤壺
2	017-07	源氏	藤壺
2	125-04	源氏	藤壺
1	130-04	源氏	頭中将
3	071-14	源氏	内大臣
3	073-07	源氏	内大臣
2	241-07	源氏	梅壺女御
2	119-09	御息所	源氏
4	054-15	御息所	夕霧
2	007-02	左大臣	源氏
2	007-03	左大臣	源氏
2	008-01	左大臣	源氏
1	045-13	左馬守	源氏たち
1	048-14	左馬守	源氏たち
1	049-11	左馬守	源氏たち
1	052-11	左馬守	源氏たち
1	052-13	左馬守	源氏たち
1	052-15	左馬守	源氏たち
2	009-14	宰相の君	源氏
3	228-06	朱雀院	源氏
4	081-14	秋好中宮	源氏
4	096-12	女房	夕霧
4	140-03	小少将	夕霧
1	186-15	少納言	源氏
5	131-09	常陸介	仲人
5	132-02	常陸介	仲人
5	132-08	常陸介	仲人
5	394-08	僧都	薫
5	394-09	僧都	薫
3	065-01	大宮	源氏
1	102-03	大弐の乳母	源氏
4	237-05	大納言	宮の御方
1	208-03	大輔命婦	源氏
5	045-12	中の君	薫
5	292-06	中将の君	薫
5	140-01	中将の君	中の君
5	146-06	中将の君	中の君
5	146-07	中将の君	中の君
5	146-13	中将の君	中の君
3	260-10	中納言	紫の上
1	053-10	頭中将	源氏たち
3	072-10	内大臣	源氏
3	072-14	内大臣	源氏
3	073-02	内大臣	源氏
2	292-03	内大臣	大宮

2	296-07	内大臣	大宮
2	298-01	内大臣	大宮
2	303-11	内大臣	大宮
2	303-11	内大臣	大宮
2	303-15	内大臣	大宮
4	449-12	匂宮	明石中宮
3	406-04	柏木	御息所
3	406-06	柏木	御息所
4	334-02	柏木	女三の宮
4	318-12	弁	薫
4	318-14	弁	薫
4	319-10	弁	薫
4	319-15	弁	薫
4	330-15	弁	薫
4	331-02	弁	薫
4	331-02	弁	薫
4	331-05	弁	薫
4	331-10	弁	薫
4	332-14	弁	薫
5	175-14	弁	浮舟
3	283-11	明石の君	明石の女御
3	284-01	明石の君	明石の女御
3	277-05	明石の入	明石の君
2	108-08	明石君	源氏
2	108-09	明石君	源氏
2	065-05	明石入道	源氏
2	067-04	明石入道	源氏
2	068-04	明石入道	源氏
2	058-09	明石入道	良清
4	141-12	夕霧	花散里
4	092-03	夕霧	御息所
3	210-11	夕霧	朱雀院
2	316-09	夕霧	大宮
3	181-08	夕霧	内大臣
4	103-06	夕霧	落葉の宮
4	121-13	夕霧	落葉の宮
1	011-10	親負命婦	桐壺母